



本当は怖い戦争プロパガンダ [宣伝]

1941(昭和16)年12月8日、日本は、アメリカハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、開戦しました。そして、終戦を迎え、世界ではもう二度と戦争の惨禍を繰り返してはいけないと、国際連合も創設されたのに、どうして戦争が起きてしまうのでしょうか。

アメリカのルーズベルト大統領も、日本の東條英機首相も、ドイツのヒトラーも、「みんな平和を望んでいるにもかかわらず、なぜ戦争をしなければならないのか」という疑問に、決して戦争など望んでおらず、敵国が先に仕掛けてきたから、われわれは平和を手にするために戦わざるを得ないといった話をしていたようです。

第1次世界大戦時にイギリス政府が発表した情報の資料分析をもとに、フランスの歴史学者アンヌ=モレリが、その著書「戦争プロパガンダ10の法則」の中で、上記のような戦時の情報操作に共通する10の法則を著しました。

- ①われわれは戦争をしたくはない。
- ②しかし敵側が一方向的に戦争を望んだ。
- ③敵の指導者は悪魔のような人間だ。
- ④われわれは領土や覇権のためではなく、偉大な使命(大義)のために戦う。
- ⑤そしてこの大義は神聖(崇高)なものである。
- ⑥われわれも誤って犠牲を出すことがある。
だが、敵はわざと残虐行為におよんでいる。
- ⑦敵は卑劣な兵器や戦略を用いている。
- ⑧われわれの受けた被害は小さく、敵に与えた被害は甚大である。
- ⑨芸術家や知識人も正義の戦いを支持している。
- ⑩この正義に疑問を投げかける者は裏切り者である。

前述の第1次世界大戦時のイギリスに限らず、戦前の日本などでも、これらの法則に当てはまる報道を大手の新聞各社が行っていたようです。

表面に現れている言葉がすべて正しいとは限りません。すべてをうのみにせず、情報を深読みし、冷静に判断する能力を養うことが、高度情報化社会をよりよく生き抜き、また平和な世の中を創っていくのに有効な手段となるのではないのでしょうか。

